千葉市文六第２遺跡出土の銅鏡について

石　橋　一　恵

Ⅰ　はじめに

千葉市小食土町に所在する文六第２遺跡の平安時代竪穴住居址より銅鏡が出土した。Ｘ線撮影の結果、狻猊双鸞文をもつ八花鏡であることが判明した。この鏡式が住居址より出土する例は初めてであり、ここに紹介する。

同遺跡は土気駅南地区区画整理事業に伴い、千葉市土気地区遺跡調査会によって昭和56年４月から翌57年５月にかけて調査され、筆者も調査員として参加した。

未報告にもかかわらず、資料の紹介に便宜をはかっていただいた、調査団長、武田宗久氏の御厚意に記して謝意を表したい。

Ⅱ　遺跡の概要（第１図）

文六第２遺跡のある小食土町は千葉市の東南端に位置し、印旛沼に注ぐ鹿島川水系、東京湾に注ぐ村田川水系、九十九里浜に臨む小開折谷との分水界にあたる。台地上は、標高90ｍ前後で、千葉市で最も高い。台地は樹枝状の谷によって開折され、急峻な斜面を有する馬の背状の尾根が連なっている。

文六第２遺跡は北東から南西方向に突出するやせた舌状台地に立地している。開折谷底部との比高差は約30ｍである。

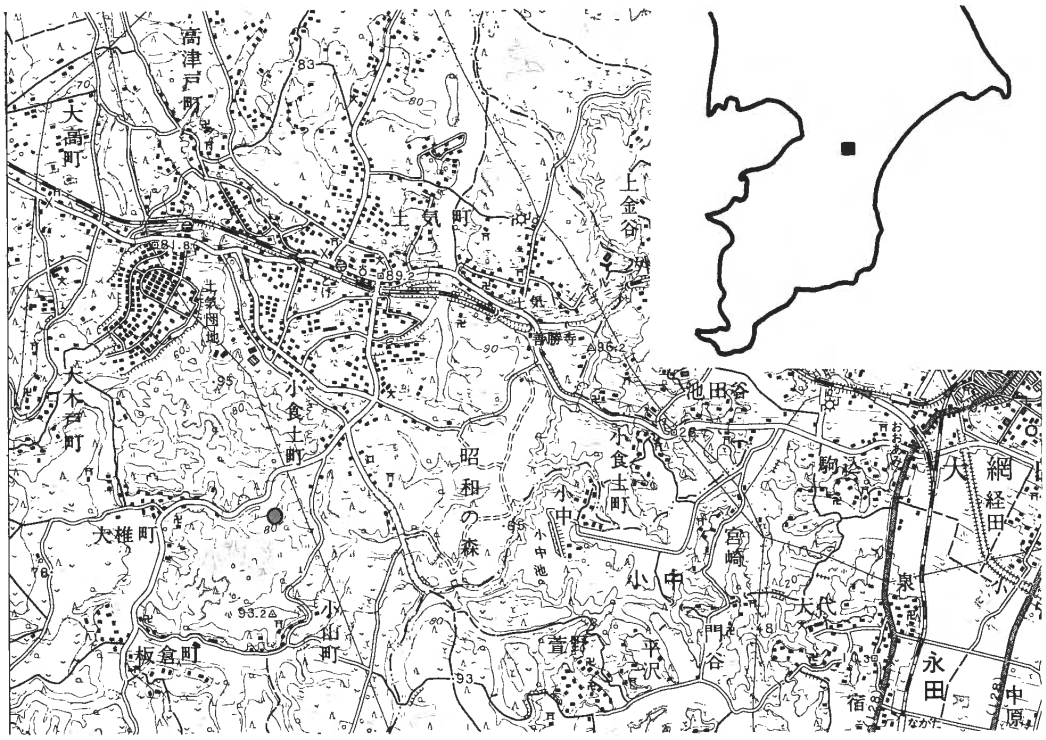
この台地上で縄文時代の住居址２址、炉穴２基、土壙３基、平安時代の竪穴住居址６址を検出した。遺構は台地の南斜面上端から南辺にかけて検出され、遺物類は数ケ所に集中する分布を示しており、量的には少ない。また検出された竪穴住居址については、すべてが、ほぼ同時期のものであり、その数、遺物の量からいって短期間のみ集落が営まれたと思われる。

このうち今回紹介するのはＡ－005住居址の資料である。

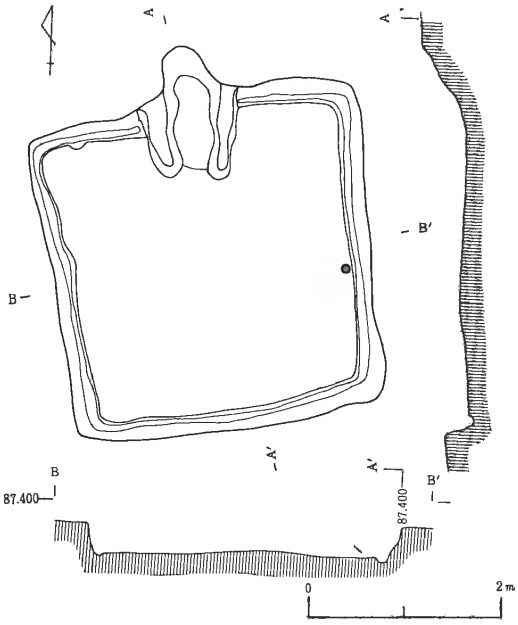
なお周辺の同時代の遺跡としては、南河原坂第４遺跡、坂ノ越遺跡、内野台遺跡、小食土廃寺址、荻生道遺跡等がある。

Ⅲ　Ａ－005住居址の概要（第２図）

Ａ－005住居址は台地の南東端に位置する竪穴遺構である。竪穴の規模は、3.5×3.25ｍ を測り、平面形はほぼ正方形を呈している。北壁中央より西よりにカマドを有し、カマドを中心



第１図　文六第２遺跡の位置　　1：50,000



第２図　A－005 住居址と鏡の出土位置

とする主軸はN－7°－Wである。

竪穴の埋土は基本的に３層に分類され、上から順に１～３層とする。この３層中いずれの層も焼土粒子、炭化物粒子等を含むが、自然埋没と思われるような堆積を示していた。

床面は南に向かいやや傾斜する。柱穴は認められない。

周溝は幅８～20㎝、深さ約10㎝を測り、カマド下をのぞき全周する。断面はU字形を呈する。

出土遺物の主なものは須恵器片口注口土器１銅鏡が覆土中より出土した。

カマドは山砂を主体とした黄白砂質土で構築され、天井部は欠落している。燃焼部より、坏２　甕３　小形甕４が重なりあって出土した。

Ⅳ 出土遺物の概要

A 銅　鏡（第３図）

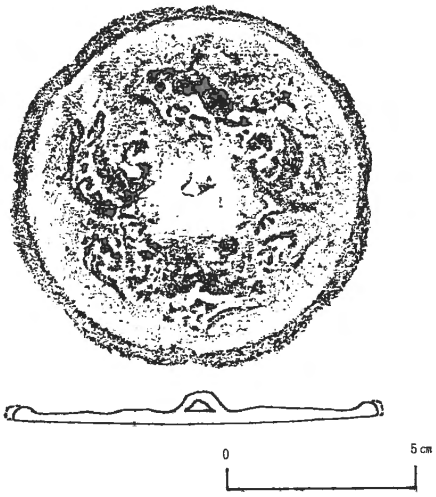
鏡は住居址中央部東側周溝よりの粒子の細い炭化物を含む褐色土より、背面を上に向け、壁に中心を向けて傾斜した状態で出土した。床上５㎝のところであった。鏡の出土状態からは、住居址と鏡の廃棄時期に大きな時間差は認められない。

検出された鏡は、外縁が八花形を呈しており、損傷もなく、全体に錆てはいたものの遺存状態は良好であった。

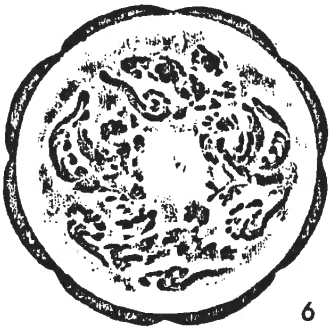
検出当初、鏡背文様ははっきりしなかったが、Ｘ線撮影により、円鈕の左右に鸞鳥が相対され、上下に獅子が疾馳するさまを交互反対に配し、空間に雲を置いた文様が認められた。文様は全体に丸みを帯びており、鋳上りは粗雑である。なかでも下部の獅子の胴部は鋳つぶれており、上部の獅子の頭・尾もはっきり確認できない。

外部の法量は外径9.7㎝、内径縦8.3㎝横8.2㎝、縁の厚さ0.4㎝、幅0.8㎝であった。縁は蒲鉾縁と呼ばれるもので、鏡面はわずかに鏡縁部で反りがみられる。鈕は径1.3㎝、高さ0.6㎝の低い円鈕である。

本鏡と鏡背文様を同じくする鏡は他に九面が確認されている。



第３図　狻猊双鸞八花鏡

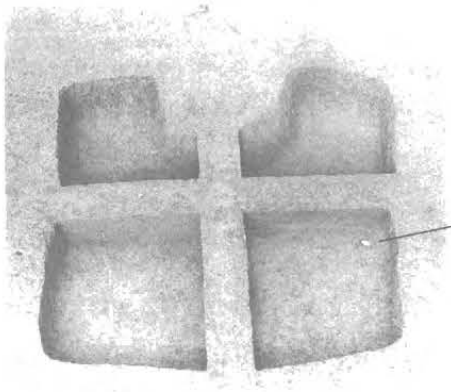


第４図　男体山出土の狻猊双鸞八花鏡
日光男体山 1963

B その他の遺物（第５図、表－１）

Ａ－005 住居址はこの銅鏡の他に土師器坏、甕、須恵器片口注口土器等が出土した。復元可

能なもののみ実測し図示する。



ＰＬ１　銅鏡出土状態

ＰＬ２　銅鏡のＸ線写真

1

2

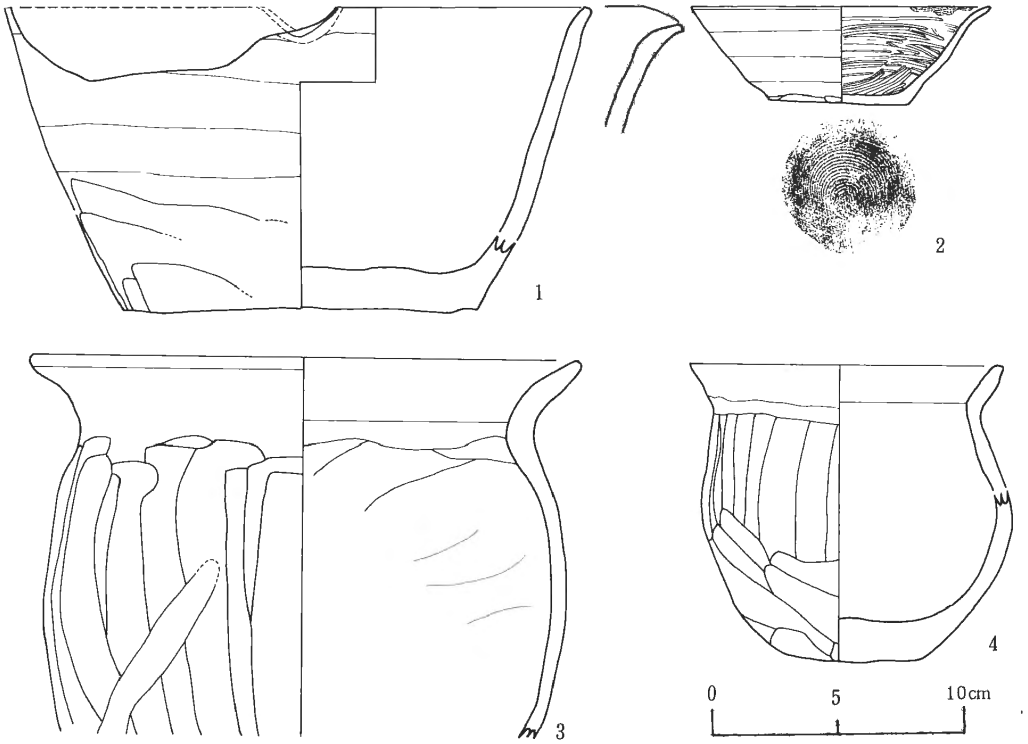
3

4

ＰＬ３　Ａ－005 住居址出土遺物

表－1　出土土器計測表

No.	器種	法量 cm	色調	器形の特徴	成整形技法	備考
1	片口注口器	口径24.0 器高12.7 底径13.5	5YR 5/4 にぶい 赤褐	底部からゆるやかに立ちあがり、口縁部でほぼ直立して終る。口縁部は段をもち、口唇部は平坦	体部上半は叩きしめた後、轆轤を使用してなでている。体部下半は横位のヘラ削り	須恵器 1/2欠 覆土内
特記	内面に熱による剥落がみられる。					
2	坏	口径12.0 器高 3.8 底径 5.5	7.5YR 6/6 橙	底部からやや開きぎみに立ち上がり、口縁で大きく外反して終る	右回転轆轤　回転糸切り　底部縁辺　体部下端のみ手持ちヘラ削り 内面はヘラ磨き	土師器 微砂粒を含む 完形 カマド内
特記	口唇部にススの付着あり、燈明皿等の使用が考えられる。					
3	甕	口径22.5 現高18.0	5YR 6/6 橙	口縁は頸部から強く外反し、口唇部を丸く治める。胴部はあまり張らずゆるやかに中位にむかう	胴部外面ヘラ削り（上→下）内面なでつけ	土師器 細砂粒を含む 1/2欠 カマド内
4	甕	口径12.8 器高11.8 底径 6.8	2.5YR 5/6 明褐色	口縁は頸部から外反しながら立ち上がり、端部を丸く治めて終る。胴部中位に最大径がある	頸部から口縁部横なで、胴部外面を中位下半まで縦位（上→下）ヘラ削り、下半を斜位（左→右）ヘラ削り、内面なでつけ	土師器 細砂粒を含む 1/3欠 カマド内
特記	内面、外面ともに炭化物の付着がみられる。					



第5図　A－005住居址出土土器

以上のような土器の年代は平安時代中頃に位置づけることが妥当であろう。

V　まとめ

これまで、文六第２遺跡出土の銅鏡、および、遺構、遺物の概要を述べた。また、この銅鏡と鏡背文様を同じくする鏡が他に九面存在することは先に述べたとうりである。この文様は狻猊双鸞文と称されるもので、それらを列挙すると次のとおりである。

三重県鳥羽市神島町八代神社伝世鏡二面

宮崎県東臼杵郡南郷村神門神社伝世鏡三面

静岡県袋井市袋井町愛野御料池出土鏡（註１）

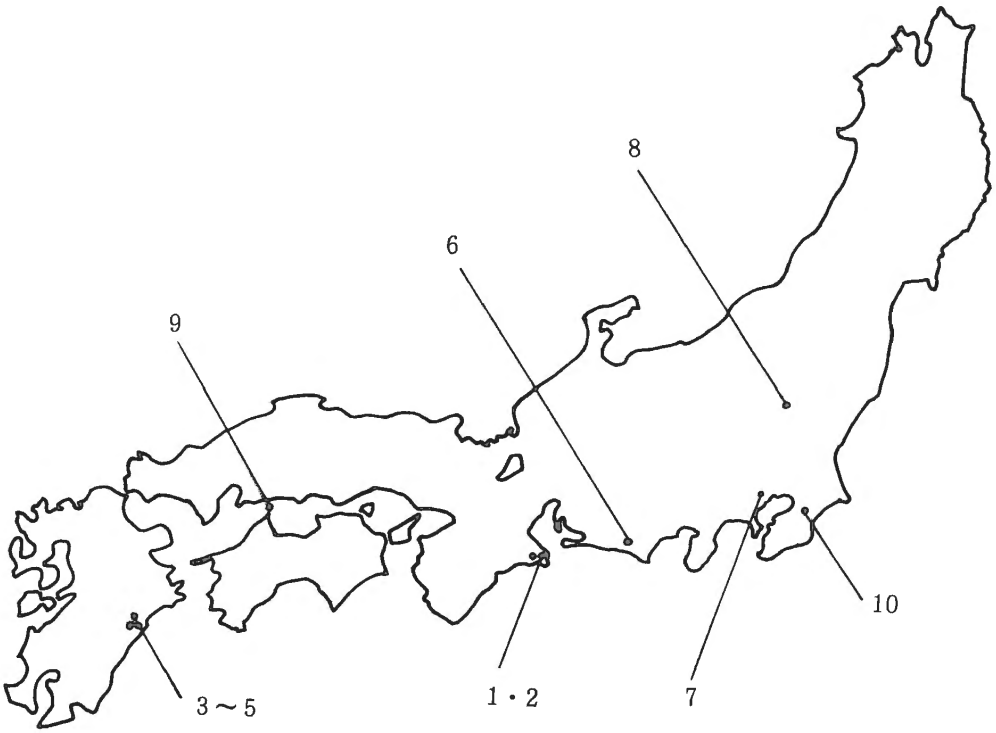
神奈川県横浜市港北区日吉町箕輪出土鏡（註２）

栃木県日光市男体山山頂出土鏡（註３）

岡山県笠岡市大飛島遺跡出土鏡（註４）

これらは外縁が円形のものと八花形のものに分類できる。八代神社伝世鏡一面、神門神社伝世鏡一面は円形であり、他のすべては八花形を呈している。

これらの鏡と今回出土した鏡を計測値のうえで比較してみた。（表－２・３）（註５）外径では１㎝前後のばらつきがあるものの、内径においてはその差は０.１㎝前後である。が、こ



第６図　狻猊双鸞鏡分布図

表－2　狻猊双鸞鏡一覧表

No.	鏡　名	出土地および伝世地	外径cm	縁厚cm	内　径　cm	
					縦	横
1	八花鏡	三重県鳥羽市神島町八代神社伝世	9.5	0.35	8.3	8.28
2	円　鏡	〃	10.2	0.3	8.3	8.25
3	八花鏡	宮崎県東臼杵郡南郷村神門神社伝世	10.1	0.5		
4	八花鏡	〃	9.75	0.3		
5	円　鏡	〃	9.38	0.3		
6	八花鏡	静岡県袋井市愛野町出土	9.1	0.4		
7	八花鏡	神奈川県横浜市日吉町箕輪出土	9.6	0.35	8.37	8.24
8	八花鏡	栃木県日光市男体山山頂出土	9.2	0.3	8.23	8.2
9	八花鏡	岡山県笠岡市大飛島遺跡出土	9.6	0.3		
10	八花鏡	千葉県千葉市文六第２遺跡出土	9.7	0.4	8.3	8.2

表－3　狻猊双鸞八花鏡背文各部計測表

計　測　点	本鏡cm	男体山鏡cm
双鳥の尾の先端の間隔	4.7	4.5
双獣前足・爪の先端の間隔	5.3	5.5
双獣下・雲の起点の間隔	6.7	6.3
上部獣形両足爪の先端の間隔	3.1	3.2
下部獣形両足爪の先端の間隔	3.8	3.5

れらのデーターのみで、この十面の鏡に対して単純に同范、踏返しを論じることは、遺物の詳しい分析がなされていない今は避けるべきであろう。

しかし、同文様をもつ鏡が、九州、中国、近畿、東海、関東と広い範囲にわたって分布すること、そしてこれらの鏡の伝世地および出土地が、神社伝世、ないしは、祭祀遺跡の要素が強い場所が多いということは、この鏡の性格を暗示させるものと思われる。

文六第２遺跡とこの銅鏡の関係については、遺跡の存在期間が短いこと、はっきりした祭祀遺跡と思われる遺構が検出できなかったことなどから、安易に論ずることは避けたい。

以上、文六第２遺跡出土の銅鏡を紹介した。筆者自身、まだ、遺跡・遺構・遺物の分析が充分でないため、現在判明している事柄のみの記載に注意を払ったつもりである。これについて、先学諸賢の御教示をあおぎたい。

文末になったが、多大な御指導、御助言をいただいた、穴沢義功、村田六郎太、倉田義広、佐藤順一、中村正彦の各氏にこの紙面を借りて御礼を申し上げたい。

註 1.　「足立鍬太郎氏によれば、遺跡地付近は寺址らしく思われるという」（文献１）

註 2.　慶応大学予科設置工事の際に敷地の一部から出土したもの遺跡の性格は不明（文献１）

註3.　昭和33年男体山山頂遺跡発掘時Ｇトレンチより出土（文献２）

註4.　昭和37年、学校校庭の整備作業中に三彩釉小壷、皇朝十二銭等といっしょに発見された。その後倉敷考古館によって調査が行なわれ、奈良時代以来の海の祭祀が行われたと思われるという（文献４）

註5.　本鏡以外の計測値は、亀井正道氏「鏡鑑」（文献２）、中野政樹氏「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鋳造技術」（文献３）を使わせていただいた。

引用・参考文献

1. 後藤　守一　「本邦出土の唐式鏡」　1931　『考古学雑誌』21－12
2. 斉藤　忠他　『日光男体山山頂遺跡調査報告書』　1963
3. 中野　政樹　「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鋳造技術」　1972　『東京国立博物館紀要』第８号
4. 倉敷考古館　『倉敷考古館研究集報』第11号　1975
5. 千葉市土気地区遺跡調査会
『千葉市土気地区埋蔵文化財調査報告１－第１次予備調査概報』　1980
6. 佐久間豊・豊巻幸正・笹生　衛
「旧上総国における奈良・平安時代の土器編年試案」シンポジウム「房総における奈良・平安時代の土器」発表要旨　1983
7. 倉田　義広　「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」　シンポジウム「房総における奈良・平安時代の土器」発表要旨　1983